

特別支援教育で活用可能な性教育教材の開発と有用性の評価 ーアクティブラーニングを取り入れた新しい性教育の提案ー

市戸 優人（札幌市立大学 看護学部 准教授）

【背景と目的】

知的障害のある生徒は、障がいの特徴から性被害や安全ではない性行動のリスクが高いことが指摘されており、性の健康と安全を守るためには、被害防止に加え、性に関する権利の行使を保障するための性教育が重要である。性教育では、知識の獲得にとどまらず、他者の意見や考え方に触れながら、性を自分ごととして捉える学びが求められる。そのため、生徒同士の話し合いや学び合いを取り入れたアクティブラーニング型の性教育は有用であると考えられる。しかし、本邦では、障がいのある生徒への性教育に教諭が苦慮していることが報告されている一方、性教育実践に関する報告や活用可能な教材・資料は十分とはいえず、アクティブラーニングを取り入れた性教育のあり方も確立されていない。そこで、本研究では、特別支援教育で活用可能な性教育教材を開発し、アクティブラーニングを取り入れた性教育を実施するための学習環境デザインと、教材および教育の有用性を明らかにすることを目的とした。

【方法】

特別支援学校高等部に協力を依頼し、研究者が開発した性教育教材（SH カード）を用いた授業計画の立案と実践を依頼した。授業実践後に教諭にインタビューを実施し、アクティブラーニングを取り入れた性教育の展開に必要な学習環境や有用性について具体的かつ幅広くインタビューを行った。得られたデータは、質的帰納的に分析し、生成されたカテゴリを、アクティブラーニングを取り入れた性教育の実践に必要な学習環境デザイン（空間、活動、共同体）と、教材および教育の有用性に演繹的に整理した。

今回開発した SH カードは、カード形式の教材で、教育を行う中で恥じらいや抵抗感が生じやすい性に関するテーマに対し、生徒同士のディスカッションを通して学びを深めることが可能な教材である。知的障害のある子どもも含め、誰もが使用できる教材を目指し、ユニバーサルデザインを活用して開発した。開発過程においては、障がいのある子どもに関わるステークホルダーへのヒアリング調査なども行い、内容を検討した。

【結果と考察】

特別支援学校 3 校において、3 つの授業と 1 つの保健指導が実践され、授業に従事した教諭 9 名に対し、5 グループに分かれてインタビューを実施した。インタビューデータの分析結果から、アクティブラーニングを取り入れた性教育を展開する上では、【少人数でお互いの様子が見え安心できる場（空間）】であることや【生徒の状況や個別性に応じた意図的なグルーピング（空間）】、【生徒の特徴に応じて話し合いに集中できる授業構成や方法を考える（活動）】ことなど、生徒個々や集団としての特徴等を踏まえた「空間」や「活動」をデザインする必要性が見出された。また、授業で展開するためには、【ピアで話し合いを通した学び合いができる】ことや、【安全に自己開示し素直に話し合いができる】ような「共同体」を形成していくことが重要であることが見出された。

有用性では、生徒が【性に関する学習を自分ごととして捉えて学習できる】こと、教諭が【話し合いを通して生徒の考え方や理解度を把握でき授業や指導に繋げられる】ことなどが見出された。アクティブラーニングを取り入れた性教育は、生徒の主体的な学びを促進するとともに、教諭が生徒の実態を捉え、性教育を特別なものではなく教育実践の一つとして捉え直す契機となり、生徒と教諭の性教育に対するスティグマを和らげる可能性が示された。

【今後の展望】

本研究では、性教育にアクティブラーニングを取り入れる上で一助となる知見を得た。一方で、これらの知見を教育現場にどのように浸透・定着させ、継続的かつ体系的な性教育として実装していくかについては、十分に検討できていない。今後は、生徒の学び合いを可能とする「共同体」の形成を含め、学校におけるカリキュラムの中で、アクティブラーニングを取り入れた性教育を体系的に実施するための方法やモデルを検討していく必要がある。

【共同研究者】：本田光（札幌市立大学 看護学部）、小林重人（札幌市立大学 デザイン学部）、濱田則子（市立札幌みなみの杜高等支援学校）、西野昭子（札幌保健医療大学）